



新編
家範
句集
雅





類題發句集雜部

戀

忌恋

夏瘦とあふへくゆあ洞う那
年の鞘焚く侍殺の坊をが

笑不遇恋

仲さりく川へ瘦ぬ夜うれ
衣く我教見とて戻りり
勢いあはは廓よあき風巾

蝶夢編

季吟

芳樹

冬松

我黒

不素を娘す満るる素戸を乳
虫丁の目より川杭を引く
故郷出く素衣をえりあふ船

老恨恋

我恋やに鳥吸まぬ素冠外
昔少人よあふれ平比の空を磔

侍恋

事久人哉娘よきわき川杭を引く

寄梅恋

わら袖のちりや又りり園の素

秋風 文淵 長虹 嵐雪 露水 地坡

雅一

娘おれ隣の衣とくくんぬとや
ふれ入哉まよひに況ん秋の香
締つまやこの依妹とかり秋
志りれうる素を明ふ素戸が

さへふのりやより素魚を送るしこ

志る素やとく氷らん素魚の川とくくんぬ

素魚にすけくとも見えと掬の戸
けりけりも夜の香をけり枯る乳
虫よ夜や事久人よよも素衣の板
馬のゆて床をさ踏つて氷の月

大集 小春 曲琴 氷花

ほふかや夏の出入乃鈴の音
あつた夜焚火の音引きあがり
男たのまふ寝覚えの音よめは寝が

氷花
柳立花
花咲

後朝の文り

あけゆく月よ夕の暮さるれ
し下は是も月よ同くも死しや
小夏風よ念志たふあつた煙は
庭か子よ夕のけ化縁のれ
さむよ夜や戻りぬと待つあつ
おきり火焼とゆきいりぬん

傳中女
幾重
山川
李由
尚志
重平
舟泉

待夜

まよふ夏夜を悉くし一見せ

荷弓

閑居増志

秋ひより琴柱をひきておぬ夜
恨み春にふ意引くる火焼は
おきやろし物とおひくもよ有
休くしや鏡の涼子たたくにも

露黄
重平
蟻水

欲言出志

羨ましく我も君ひあをさる時
ぬやう火や折し煙を君の顔

秋候

志願の夜の鐘おそくは木影もが
宵の待方よつた水鶏の乳
千那
若菜

別恋

文月送りくはれ方と女あり
且葉

忍恋

たけ花やかろ友をよまふは
能くふし藤てふは世の度は
花女
浮橋

送別

乙州の東武より送る

梅の葉はりの高のうらみ汁
毛蕉

風深を憐れむ

高れは小夜の中山おてきめ

いん何うかきおくはる馬の街

月夜を義の中から妻おぼ

昔良は後成病くたるとりては

きふらたは身消えぬの恋

支考 東の御所

はあろ持をもふりこ器二具

芭蕉

麦の穂茂ちたつておる乳

孤舟旅立ちを敷市河うらたに石川

月より尺運りそ

雲かきし何ほまそひも昔の市

形坡

月より懐きつるを馬鹿と

形水

物いふたき入秋のやうなり

舟象

友達の公家お刺刀さくくと満ちるやう

秋はゆき入送敷月夜

卓袋

惟幾子より滋園送るこころ

好危さる高き有へく去る意

自笑

苑の右より帰る我送る

木がしを吹ひりりるすこころ

嵐雪

柳磯 麦畑にひびく送る

虚を越引く先を也風の中

海の色や紅から輝のうらを際

出水

別徳

ちるけ風をかひきさけけの花

裁人

夏のふきさるるをさあうれ

才魯所古て入停せりたに
よさをし申さるる桂月
立時り高れやそ其八扇うれ
流つまの心ぬあやいふあや

乙あうあひりたに

可きおき入るの流や富士の雪
たれりて被りす秋の露
厚れあおのりく何而里
糸川くひも流ふ秋の風
ま方としぬあはれまき乃くぬと

公来
霰般
大子

智月

一井
支考

嵐浮

雜五

夫名比の氷踏りたる秋うれ

杜國

採吟まあう時まよと今其いふ

堪て世の古草茂たるとい置

正秀

送るこやひの山好秋あて一泊

利合

山川く公もやあれ念老を

北枝

蓮二法ゆかき送る

青葉の片もや解くはる何処へ

乙由

留別

川妻の多啼魚の目も洞 色蕉

送る此送る山て木骨の魂

少枝とらふの足送りくはまはく

未作らにあまおそそて

おとく扇引さく赤波の乳

孤舟鹿より芳那へ松をこく

けしや哉念ふ礼いふさうの那

舎飛さるりもれり

短衣の足巻や新十たう架 支考

鶴に舞うと衣を舞う 文衣

春笠や田植のさきほまきり

舞よふあおそそて

ひくくたふあおそそて 萩の系 曾良

春のうら花てさあそ大根引 冰巻

葉踏く、踏く砂比の名あが 素中

ゆんきりて跡を春秋と下り危

終の役の危哉立出さく

いやしく乳捨る 危衣菊の南 結道

新我出府人へに日の園より
 物んを川へ流すはあつた
 浪化
 乙由
 許六
 乙由
 柳若
 彦元
 謀反

騎旅

花の陰祝ひ似たる旅案う乳
 一の挽きりくふは負ぬ衣の
 雲花をらとよやまらふ峰の那
 まへしりや馬とよ氷ふ乾法
 夜着ひの初や井しう旅案が
 多うしぬ筆墨とく子鞋を靴か
 帳子よあつたさうり山田の出が
 おらうくは多や出立の後の下
 毛蕉
 彦元

長旅の夜も旅の心も高き旅

去来

長崎の旅の夜

舟の心も今更かり茶や白く雪

舟七

旅の心も健たつて雪の旅

去来

あつた夜と心氣ひの旅

治徳

元日きこひ人旅の心

時佳

あつた夜と心氣ひの旅

ちぬ

夜も花の秋風吹く山

芳良

我旅の心も高き旅

治圃

旅の心も健たつて雪の旅

治荷

あつた夜と心氣ひの旅

涼菴

大急の夜も旅の心

臥高

あつた夜と心氣ひの旅

左次

あつた夜と心氣ひの旅

許六

あつた夜と心氣ひの旅

、

あつた夜と心氣ひの旅

、

あつた夜と心氣ひの旅

与考

秋風の吹といふく 橋ぬり乳
初あうやをよまらふ 枕りゆ
る吉の戸たたくとこの 雲う乳
旁も風 接多目も 寒れは
帯たし 旅の衣の 衣の元
夜の中に 木は 雲は 雲の
舟あてきわく 氷の 渡り 舟
立と 舟や 舟は 舟の 舟
夕立よとの 大急う 一も 舟
風の吹の 舟も 舟の 舟

支考
玄梅
一人
一有
荊口
秋風
里朱
傘下
仙杖

雜九

梅の鳥や夜明の鳥のいささか
瘦入るやよ食う者もゆわゆる

孤屋
冬松

山中に入海

定もとわあは 幾日も 雲風

特松

南郊よまよとあえて

木ももらん 若も色雲の 静さ
大名の通り 通り 秋の松

、
、
秋及

伏見の夜毎あく

舟のくふに 舟のくふに 舟のくふに

踏通

あてふれははまきくもわ秋のそ
燐輝やまき此筆をよ不ありひ
旅人やゆり合もく不破の月
手と伸く長を子巻る馬路と
今朝の月風已きれく衣うへ

鞠子の者有りて

夕敷の煙影つふうせり計
皮針老枕あらくふ夜無聲
かろふまや葉はぬれさかたき

臨風 万子 木因 千那 乙由 紫遊 千梅 相西

名所

元朝の月るおる甘ん不二山
是多くことか花のすれ山
地をうへ木のりれ志老林か
富士の山海まるとれ土姿くれ
三才地多ふ成つてねて山もか
富士よそかき三月七日八りり
幸崎の雲あ花をり鏡まて
象沼の面や西施り袖ふのふ

宗鑑 貞室 季吟 湖春 友静 信徳 芭蕉

かろつかり南島のりひを傾廣の石 色蕉

己ら西成を兼てこやうな之川

枚の葬の古の若地守

田一枚植てまき敷野のり

五月西にかりぬわむ勢多の橋

芳野りり

花さうらふあ日ころの船わあ

伊賀の園花垣の衣多そのかき大重良

八重橋の料は謝れりり云使はり

一里ありぬ花身老子孫や

舞士

六月や衆は雲杉あつ山

淡のり月さく入る浮津を

子福の香もりい入る右も有様

月よがたけやてこさく己ら富士

葉のまや木良少ら古ま御達

棧や命哉うらむ舊うつ

雪崎の周をえんやわ津千鳥

厚さくく春相の田西やまの雨

隅田川あり

鳥帽子をぬがぬりかや

其角

須磨の山より何ぞかんと
ふりくろ編を二ひれも大井川
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
嵐雪

舟宮より

暖海中の瀬きくかた
大系や塔のまゝもかたなる月
北窓幾やぬもあゝあゝあゝあゝ
さゝの山又あゝあゝあゝあゝあゝ
記伊のまゝあゝあゝあゝあゝあゝ
孝加一道の修理あゝあゝあゝあゝあゝ
太来

つゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
はくろろろろろろろろろろろろ
言はつや廻廊十夜の明やあゝあゝ
カチあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
越後あゝ

人々あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
阿婆あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
木曾あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

山吹もあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
許六

八松や田さうら有く啼蛙 許六

宇津の山あり

十巻子も小粒よあつた秋の夜

西川の舞あそびあり 八休田の太夫

装束つくろひきりかひ出く

うの急戦かきくに開のしんぼり 智良

去りかたに身ごとくし物あは

大いりやうの春の花衣采

和舟の浦

五くひ観きうく 片男波 弥壽

高人のひらき舞きく高世小 尺子
麦うらや内かゝる志賀の里 重子

子洋

崎日もさゆ乳母のあはこが 尚永

道もくた多賀の舟井のきり 舟象

去花那や幾ほもなる付雨 随友

か、松やうあり合せく神くれ 支考

湖力も読りさむ比良のきり 支考

歌あらしも軍あま出りけの山

燈籠やうけ志る山彼を名ふ

双林寺果阿弥少く

名月や橋をまへしう東山

去那其二夜望田あかや初雲

多痛やむれあはれ字活を

山万嶽の葉と通ぬ

引ゆや山をまうりて那らの雪

在原寺少く

青布と我肩をたぬ水は

玉水の空より

山吹を吹くは地をぬきぬ

支考

此坡

古木

万子

と

宛費

雅ナレ

枯草や露波へ白きまうり波
さるるまうりまうりわが我の

安老の園少く

雪の養子の春中とまうり
乃たまうりかほしやするの秋

橋立や志まぬ去の一文宇

まうりしは縫子が答を候通

すゆのえくま活りり好のれ

當麻少く

衣のえくまうり織ぬ死海し

晩山

言水

家川

木周

調和

その

木がけに吹風く立や鏡山
香坂や花の梢を車より
似合しは谷子の一帯や須戸の里
八重を敷きまて又くは龍田

不破の関より

目利て日る人者とも月足が

六条河原の鶯の鳴き声

堀籠よりひつれりる前子丸

道成寺より

すらの谷へくまを歩らるる那

北枝

初月

杜國

如行

志水

芝栢

維十

けしきをいふより入る

雲の山々今の山は敷は似てあは
孫くらや岷岷を浮世あは社
名きくのもては岩城の鳥丸
軍かりは空と暮らるの清水

高野山籠寺より

我目やあまといふく清きと
あはぬ火や浪の跡あま書とて
夏子の七つあま妹、泣くれ

那谷寺より

祝林

雲巖

其談

乙由

唐元

免士

今入て石と如りり秋の雲
まじり立や海は一箱書あり

希岡
雲裡

信りり

海空におく河か夜舟の種月

麻父

出羽大沼の浮島あり

雪を梅へ引分るく咲つていぶ

塘雨

哀傷

人の方ほららり我は

雲の書我死ひはまら夕人う那

貞室

は時とそりさ先くと高くは

李吟

人の子のいこころ

さそ候懐びんも象みくま

方山

千子ら方まららりやびてまの海くちきり

おれ人の小袖も今や古用ゆ

芭蕉

りまへよたとへんはる友那ふ

塚も物け我あく如き秋の風 芭蕉
 煙風り折ぬく出りよ葉お枝
 露奈さめも焼ゆき煙う乳
 尾毒貞さ方ほらうらうら同く
 数あめあ方とれ替りひと玉まら
 出羽の品をう旅中よ死せり一
 當帰より表れに塚のすし乳子
 養ふや稿書やや乾桶の水 支梁
 妹の此まからりらに
 きのよと無く消不堂う乳 玄来

中秋の夜猶子と送葬し侍らう
 加敷夜此月と見より形と送
 孝下、妻よりせぬれら
 療れまやかえ冷ゆく北世し
 子にせぬれら
 似顔のあうと出く見ん一編 落括
 母りあぬれまら子の表まきさ
 せりれ子やひらめかや秋の乳 尚玄
 娘哉葉うき秋夜
 叔の語古よ葉まきさるる乳 玄角

孫女毛伊奇に葉を敷時
其角

かたのそとをよかくまゆ枯尾迄

懐りこ方まらきる人哉
嵐障

淡雪のともかぬちよ消えり

かき茂つてを
惟也

少しと麻木の葉も却れ

毛伊ちの塚とていひも海つたき
丸雪

は下にくく眠る人雪佛

をこ子さうしなひも
来山

曲響の鳥哉つてみく

呼吸多たつて雲のきくらが
文字

元妻はゆりあきらむらに

妻の中哉投出さる意うれ

妻より世の山とていひも

かひ親あつてくきよ鏡が
木因

七月十日のりはせしうらへり

をよ死む仏の中中佛うれ
智月

人の子くしあひらに

あそ思れ小瓜と見ゆ葉う舞
荷弓

花は死の匂をうける

いさゝかや我を忘れ月夜 秋風

孫は母を死後や三日葬外は

名残出づ難き人の枕の志 猿轡

東山は老母の死と嘆くとき

昔のやうに秋さくらを忘れぬ 紅葉

老母の方まうらむる夜

きの秋はつゆをこころ歎かす

道徳翁の忌布を七回くくるといふ

墓の昔のやけは積る音 文考

出羽の圖司は老う節は死うらに

死うらまでその二月老花の時

病中は死をうらなけて

うらなむく追ぬ死出の寄れる 形坡

葉のまゝまうらむくや一七日 種葉

お年たつとも

葉は死にうらなれたるもの 乙由

亦可死に没せし時

秋中一歩へちる葉をうらなむ 文素

懷舊

高野山よりて

父母方志まらに為りて終子の如 芭蕉

太田の社ありて実董の地成んく

おさんや北流此子下のたよりか

雲州高野山より

夏子や兵しくも、愛此の

故を辞味このをりて

さあくの事抄りて出と極り

たつや胸の結まありて此書

懐舊のありし小替のつるねの位りて

うしろや外の子と人此果

朝長此墓よりて

うら若方出まると敬さる 此翁

己月六日大坂の討死方名達是哉

吊ひく

大坂や刀ぬきをの夏此二十年 輝吟

赤同軍ありて平家解まるとあそびく

けし海流のありて流るる平家と 涼菴

西行上人已百多矣

連翹やその子れ日と暮る風

胡及

亡友芭蕉居士迎東山家集巻末

那解女志とてれを披け追悼

此集を讀誦す

念さ如財雨をみるの山家集

蕉堂

芭蕉高屋よりて

歎とく孤そびに秋の氣

大坂討死已十四日あり

看とく冬二夜中へは妻が夢

許六

芭蕉翁三四思

月をよ淋しくけり残子れ

海川芭蕉庵を去りて

豆腐をとりての歌や機ひの妻

若戸の浦に男の塚あり

せて若く何をいふに田植時 志考

加賀の令留守八代所は御の起り

庭掃く雪をわきにちかきとつて

その節を詠とゆへく

青松若くは葉の秋もまはる

葉さねの母のひきよみしは

明水

芭蕉菴の書きかたなり

すし葉小端はひしひし

曲翠

金佛寺の廟よりかき

笠提ぐ塚を先くねりて

北枝

棠結易地

大急の字は柳葉細く

三秀

鳥籠下りて

外の花より急なり

曾良

市原野より

吾妻の小河の青の尺草

約雪

河内親公の書きかたなり

河内親公の書きかたなり

楠木造ぬりて牡丹

お揃表大磯より西の

つらつら、雪立深や

つらつら、雪立深や

鳴さくあふおと何ふ

古戦場より

さくかたの廻りて

乙女

武蔵の坊賀上へは雲より
 け塚を探りて苔のふもれ
 強食する
 乙兒
 熊那の海邊より素の徐福塚と云ひ
 まゆりて死ぬる塚に一人
 探る

述懐

うさぎの崩り乳身のあるひ出
 大かき此月ともめてし七十二
 人をもたぬ妻や淡衣をくもれ素
 雪もかくもあつや雪の枯尾迄
 け秋を何くもまらる雲より
 在り旅より代う小田のひ戻り
 井より入や嵩を食めてし海苔の砂
 旅よきて後を枯野をけけらる

湖春
 任口
 芭蕉

手懸く友り何ふ

冬瓜や一斗にのり敷敷のあ

色蕉

古是は左の四十二足と踏こみ

嵐雪

くもあけくすの侍りうら

衣はらう外さるるぬぬき

かくこらがるまゝさるる

警水

病中

ひ燈の灯も君の筆も書けり

蕨立ちわたくなくて葉もけ

くは事の追へまゝく梅老婢

映山

新巻

朝敷の種も敷入老公の郡

和及

色蕉菊の塚もまてて日る病身を背か

師実や塚も外り何そり

丈草

雪もさる方の上越鳴かす

家哉焚く

焼りき祭も花も敷は

北枝

鴨啼や弓矢と捨てくす

太来

老去志と指やきん玉おれ

秀妻もさる家物お月刀ん

正秀

かろうと前へ山七話の妻の

手より此歌もかきとてたらしむ

新月

我身かよく病をわたりぬれば髪けつらん

髪けつらんを換てうへく

笄も根も髪もやちり落

羽紅

秋の田やこがらそくそ釋二儀

尚公

愛う方子梅風室一親二人

完黄

手庵を捨てし出るる時

消る耐も氷も消くは引く

路通

我の毛く塵我出く風巾

大福

芳時きと塵あたらぬ葉種さ

妻妙

維元

杜若の川乃ん牛そ似かゝり

似若

今も我我たせむりし花冬鏡

日葉

厚ぬまゆ夏の酒債と訊ひり

千那

杜若よりかきとて

身我替へふまはる故登の量り

言水

己斗の果れぬに櫻枝おり嫩

冬くは花いそくや花蓋

許六

初雪より雪恨くぬる疵まら

雲龍

口十粒鏡の影かきまらぬ

朱林

折ふ巾三十までそ夜守の秋

八橋

系かへん見ても物敷のり世に 舟坂
疾風とふ病敷思ひしるおし
酒堂々三四思ひあさるまは
物果も昔我かきてや仙あり

病後

死あまけりた日を物敷三月に 秋
焼中病よおしきく受候から甥の
男お方へ中きくまは
物よ死し跡敷たてけり子のお
病中盆全我いしるれく

菟棚り油火ぬく我くく
透柳よ志也く起く日成待方
鎌倉建長寺よ侍あり
落葉うく月あつぬれおるも
ひくや秋よ念敷とがしる
古ののりおひお敷噴り
あま光の暖候や冷ん時のお
三井寺の歌きく初月をいしるあり
八の親子とら志はりくかきれまは
兄方とら志親子とら志お秋

さあ〜おもしろ〜を抄ふまの〜れ
除風

こころ〜思ふ事傳はらば

〜幾〜まま〜を抄ふまの〜れ
白空

〜川〜ま〜ま〜ま〜ひ〜あり〜れ〜も

起〜〜〜

さよ〜月〜の友や者〜者〜
此書抄

痴中

抄〜の〜ま〜ま〜り〜雨〜の〜業
可風

贈答

信奉江戸よりよりのりた

〜刃〜〜富士を〜〜目〜り
季吟

杜國〜あり〜

鷹〜ひ〜刃〜〜〜
芭蕉

美虫の〜言〜〜ま〜ま〜

長等川の氷橋あり〜

はあ〜ら〜目〜刃〜あり〜れ〜

涼〜さ〜我〜者〜あり〜〜

吳淞路より李由り許へ消息のさしに
昼歌より登春せりまの床は山 芭蕉

その女らあめく

暖簾張の妻のゆるし山老梅
手紙戸を忘れや種葉子名は

露沾ふりし

西行老庵とありん花は花
涼しき冬指曇り刃ゆり信指は
秋の夜とくも漏しう味う乳
やうりもん藜の枝子朱の白き

雑

若葉あつとふくりそれまふ家が

お成芽舎りわがしきあつとく

けりし松笠りえを月夜 去芳

芭蕉翁とあまそれりし勢方く

りあはれとまふ時ありまの夜は 斜旅

文りあ子衣切で譲まり 丈夫

翁老七四くし山せりあれき

於無名庵り偶指しそ公地まへ

そくまふ去まうかんやまきしり

朝暮や茶碗の後お茶端

うゝ

船も舟や人來つんき暮らり 志未

堤見方の筑紫とらとらりきた

あゝ昔く一二細の風あきひ

虫鳴りく支考にあひてあし柿舎の

中あやたつこころり

鳥方おぬ教り向き入縁嘆の

柿

返

柿の種分かえく様無が 支考

馬の白取らる男の跡にと粟稗とて

維廿九

り此伝やと尋ぬりして

外あまの雲の粟田や比叡の秋

神風鍔半成り厨り錦あり机よ虫河り

吾らぬれそれくつり子のあ 木固

幻位産哉坊ひく

木啄の杓をつく位我うれ 曲發

芭蕉の庵や取ぬく

我り冷を推の木もあつ支本立 免黄

くく先く菊女ややくら夜

お和字に花旅春よ坊娘を弟也 如行

於り仰らる隠憂より中をきき

焼火より草木の燃焼をよみて 千川

海より舟の往来をよみて

雲霞より冬木の梢うら 高川

糸あふ入り中をきくはな

一夜も三斗青くく神のれ 尚公

もせは病をききたりきくはな

涼風も出まゝに寝れこころが 遊刀

将兵の田との子も入り入るに縁か

のぬるは先替ひつくかぬれ 壯年

伊勢の涼風より草庵をきかれく

萩の友をよはせたりくさ 舎飛

将兵も松のうらをよみてはな

啼くもて草庵をききたりはな

山村の松のうらも木の上をよみて

木枕の垢も伊吹よりかたりき 大子

こゝろ

夢に又もて春をよみてはな 将兵

手強く娘よりあふ耐

あはれりた何とあふたりはな

曲翠の梳篦を流し湖水と共の山
 連やあやを表衣たる起し人 乙角
 小枝或手をとりやうはて
 衣の袖をゆりて足さるる露草 句堂
 之
 夜着けくくは神あり墨火燧 北枝
 情多かり太周の若草流くまら
 衣ありその雨りまのしん
 千鳥のくやむく産妻の待らんか 飛坡
 訪遇者不遇

雜地一

食粥を抽味喝の谷おいとく 程己
 相志あり女帯の意仕へおらにや送る
 萩萩も深きうらやと女帯系 後吾
 洛中衣去林掃ゆり旅春さく哉
 越の梓仙より可れく
 暖簾衣去掃しつる深き衣 乙由
 涼巻く末君とあはく
 季の衣り二人は光はちと海 老士

画讚

三聖人讚

月花のちんやほくのありて達

芭蕉

凡意の画くは誤りしんせ

物取あふ子のあきへ気あり

三威像後鐵肝石心此人之情

持子よりかふ相や楠木衣家

小町画讚

まきやきあつらひとる兼と笠

雜世二

盤鉢よりあまをさる像り

雲りくあふえんのしらつま

布袋の談

おのや袋中月の月と花

顔布らむけける像り

あぢくむけ糸も掛お秋の糸

扇木の強り

さく死やと布衣まゆ女房

そ南

源氏の画よ

傘持の月よおくさすことば

寒山の謠

夜う忍りいそく雲のそ食ぶ

七角

芭蕉翁の像の謠二首

月忌の外より用外交病う乳

形披

却りし深川より冬筆まきことしはん

はけし死とありし我替ひ出く

冬筆まきあそく角やあくえん

裸子の謠

もこり子と抱えそやらん瓜一ツ

支考

大江山の強り

雜世三

せくき北風言まきゆり山きりく

風雷

小町の謠

我悲と目も鼻もかま花の色

持女の強り

この方と折りよきあつそ雲ひる

光貴

吉井小築の強り

懐り顔すそ衣そ夜う乳

立吟

亡海の画像とよつらう雪し那坡り

送り深川の庵の什物そ寄附き

賢の案世言の耐強まきこが

許六

葉子を下りの強り

は平然と先づけりやき強重

木因

八重をさぐる厚風の函り

具足為と秋のそよ月見舟

池水

坊々の梅あさる扇り

橋下りしそよぐくゑの秋

北枝

穀宵の讀

そよぐくれ扇の骨や秋の風

乙由

許六の舟の強り

け君の舟りういねと音もれ

免士

雜世四

乙神繪賛

松り梅雲衣社為同屯とも

後河
白隠

蜀士の讀

六月や日本よふ山ひし

巴靜

三保の松系の強讀

涼しき強すとあつて三保の崎

乙筑

詩哥

非路山を法系の白く西行上人の哥にぞりて

何の木の花もさくは白ひく乳 芭蕉

七夕の夜風雨ふけりりりり小町巻

哥女類くくく

高水より早も旅亭や名水止

花盛るも男の心哉とて山家集の歌子

あらふ

一露もあぬさぬ葉か名水止

花下忘帰因美景の心哉

床入るは物引馬をさく心此下 舟水

夜来風雨後秋氣愾然新の心と

秋の雨とれり瓜すふ入る心

就中断腸是秋天の心と

雪の旅をゆきてハカク悔老定

一鳥不啼山更幽の心哉

木の香ひくらたふり葉山子也 凡兆

馬頭初見采叢花の心と

熊谷の境よりけり老花 許六

常若あはさるあはさるふ奇のかり

くくひまの小結や河津花結に 許六

惜花不拂地の公哉

る僕も花より朝来あうりり せ角

暗香浮动月黄昏のつと

入木の素よりあうまむひよぶが 風麦

宮粉黛無顔色の公哉

宵一の縮つま消さや月の歌 長奴

宮中拾得娥眉斧不獻吾君長愛君のつと

花かろう極えらうと牡丹丸 越人

雜世六

一きくひまも南世阿弥陀佛と不入老
連のくくりののひらぬ多外一の公哉

荷よりあう蛙あひの歌を也が 李由

月移花影上挿干のつと

月歌のひと極うあふ接うれ 不ト

次ありはると今あ山や井ふゆ境の

舞まきあありととふふよりとて

山や井ふ境の中れ置火焼 大守

釋教

七教必り南無阿彌陀仏なり

守氏

殺せ戒

蚤故とも殺さく殺せりん

貞位

本教寺あり

物死し何そ自力を處り

宗因

丈六よかけり不高し石の上

色蕉

或は識示て回さま禪大悲のりひとわ

結書りきよめ人かをそさ

難飛七

寺にあり誦教あり月見あり

明徳寺にありりりりそのつ後の信をの授と

是るところ候やはくちりり

煉取くちりり同中なれり

不ト

常迅速

嘆つちりり停れは女子の如く

全下

高野あり

数花の繁ともまら美の流

杜園

妻の教ハ詩り初能の堂を

曾良

端りて弥陀を文りりかきり

玄樹

尼寺のくく菜の心れちる位 言水

法隆寺の南無佛の太子と物む

神務のころれ多しうゝゝの心 千那

内秘言薩行

夕立ちり踏ふえゝそりゝゝ

館の菜の後り菜うく乾仁五斗 松芳

皆是吾子

似我娘のあゆ子とあま彼名 治位

魯九の刺毀やゝ時重辞を

世体と出くもゝほり河の交の月 文孝

けり畑や教さつらまらて仏在世 乙抄

菜と品如子得母

休立ちく登えところつく大角豆が 胡及

同如病得醫

かろく時清水乃身乾山路丸

玄如事うく若光寺かま小用帳の時

涼くゝ那山ゝゝ川ふし心仏が 奈来

呪礼の時

爰招り卯の心き部一初能山

故物まゝの中に若あり人念御持 来山

一切衆生悉有佛性

盗人亦名法師、言のやせり

来山

前業所感

魚のや猫の爪と因果証

西吟

薬草喻品

百子やひひりる不審の中

神往

無懺愧

深縁縁治うれんふ傳つた

落格

深着世界無患心

つる光と靉とあつた大梵

嵐雲

雜形丸

煩悩ありて受生あり

骸骨の上で寝る花見丸

鬼黄

焼く火より灰もあきせては云はる

修羅道

ゆくは切ちりる西瓜丸

百里

人道

まうとたまたま恨くや生れ玉

一夏心抱り筆り

牛に釣る合点そ然素夕まき

与考

念をり於事と夕と丸

飲酒戒

休の樂のさへもあきらめずとも

殺生戒

いづれとのまはれ命をたはむ

法花八講の侍りに女はるの輪阿所と

笑ふくは茶とれ雲晴とてあま

親女感佛のありしうりてまのあへ

鼻うき音のしりれ

はらくしあつ酒や飲まむ 越人

三畏無安猶如火也

六月のけむらひあつ巻うり

草木國土悉皆成佛

を柔や捺排もくに佛也 丹波

隨縁真如

時あつら思つらしてあつの魚 丹野

滋養花のあつ

首あつた編書のみかたを耐 木高

絆の子つり木物とくつ法ゆが 卜枝

泳陸光明とてふと

小服あつひうらたやたを玉接 角と

地獄

せきりすて見せくすやあや

それ

法をよ入

あふまつくろふれよ鶴うれ

角好

飛科のちうくさうや古扇

暮由

昂才即佛

裏陰のそあふはんのゆうれ

忍意

呆らふれ仏の道より落葉と

蓮之

奴とちりり

及達の髪よ掛ゆるりひれ

希肉

雜四十一

畜生道

鶏を日よれしてあふらゆまは

乙由

六月の末高野山よりとらきた

羽をつとまきも浮世の道まが

監吹

三尊唯一心

ふせらや夢一とくかむんをり

牛

不樂圖浮提濁悪世

けり老に居りつとる 麦埃

探麦

神祇

伝方世も是も宛物のきとくは 貞徳

伊勢少くも時賀と人老道公と形て

たまひく事成るひ出く

福少くはくたきく土の嵐くれ 芭蕉

二尺の圖成おし伝りく

うさうあれぬの花も浦老春

葵田の社高候辰有り此

磨直人候と信く一雪中も志

鳥林山の禁を通るく

於乃くくはよゆり井の款

船考や言らる井と出るに

子乙女の尺よりく色の鏡くれ

とらんくも物ちらうの款毎火が

この忠たりて

目ゆきいそ秋の色も鏡くれ

愛も水あひてまも井の物

伊勢は楽

書は書と知克の巻れ一つは

明水 言水 荷弓

方山 龜洞

許六

仁者法樂

月花より出りき下冬の鏡うれ
心而に西よりゆらけ非塵身
妻の考やゆきの跡の炭の切
文子

みえらうの社よりおと形さうさく

夕立や田もえらうらの非あり
を角

後波の坂本跡を非は雨をとらうと

非風の雨こそ白へ夏もなす
除風

元日冬は法沙月あしぬ非代り
溪石

庭きけ庚申の夜も藤ぬれを
冰巻

雜四十三

庚申やこゝに火燵の有夜姿
残る

舟の子やま川地奈の二はしら
高川

冬きしや福豆の抱く油つ
落梧

佛らり非そそくた今時の春
て免

非枚やきりけは尻く燵の色
我黒

つれ立ちく舟屋廻り燕うれ
如象

夕立や曇もゆらけ非ま
乙由

備中吉備津宮

後のきもさくや津奈の山ひた
老元

祝

夏哉祝ふ

後り今朝のつゆあつきの松

季吟

知夏の新巻あて

とたふや将ともふ春風の葉

芭蕉

志すかく水原のうらり

先祝へ書とあふ夏冬筆り

乙お共巻りて

人よ家と実せて我多うく忘

維四七

茶事の時七十のあつきの秋七月七日

とふまきふたふ茶七粒と飲ふ

七株の茶の日本や夏の秋

是橋、刺髪へ醫門を賀す

初年に松の刺し歌の郡

武士の子の生長哉祝ふ

筆の時とらちうらの中

去来

手たぐり秋織りふあつきの人を賀す

花を実も咲縮みふく秋の娘

千げの秋白ひよきうら

龜洞

於へ學問よりうつくしき儒士の子り
 本心およみあり相の若きなり 許六
 駒舟能くし人哉 祐少く
 時とて 把り教ふるは 秋まは 酒堂
 武家の家督お渡り有る 祐後り
 鎌倉の接種の上 清とて 才なり 万子
 姉と弟と二人のあひあはる人なり
 中川ゆきり 難うも人々 懐きて 始連
 百姓の子を二男三男とれく
 仕居るも 月を 満りに

落葉荷果 敬とて人の家 吾が 知足
 禰弓と 四十の妻なり
 我妻と 休そのまに 入るなり 重五
 徳お大村の 何り、南家の 祭り哉 祐く
 和つれく といふ 高しと 所録 世坡
 人の 皆礼哉 といふ
 己の 休の 根まがら ひとり 縁とて 夫 与考
 三つ 相や 秋花 下付 出る 園の花 望勝

安永三年甲午三月

書肆

西村源六

西村市郎右衛門

井筒屋庄兵衛

橋屋治兵衛

梓行

蕉門俳書畧目錄

書林

井筒屋庄兵衛
橋屋治兵衛

奥のふろ乃一冊芭蕉翁

俳諧漸拿十冊貞徳

同菱菰抄二冊製一

風俗文選九冊許六

俳諧埋木一冊季吟

いづを著一冊其角

葛原松原一冊支考

笈の小紋一冊乙州

森山ふひ州一冊丈州

續五論一冊支考

笈日記三冊支考

枯尾花二冊其角

笈突一冊

津島(讀)五冊支考

芭蕉新繪詞傳三冊	蝶友	蕉門俳諧語録二冊	蝶友
同 發句集二冊	同	去名 發句集二冊	同
同 俳諧集二冊	同	去名抄	二冊 蝶友
同 文集二冊	同	芭蕉門古人真蹟二冊	蝶友
同 附合集二冊	蝶友	新考	一冊 同
同 七部集	是れ日等の日記とて岸之儀 積りの積さるゝの河の如し	小刻合巻二冊	
同 大字子紙本七冊	再刻 改正	去名 蝶友編	一冊 蝶友
同 續編	海川 却名集有得海 蝶友心 韻ふゝ宛小文 意ふも別	小刻合巻二冊	

本朝文鑑 <small>假名文集</small> 五冊	芭蕉	類題發句集	五冊 蝶友
新撰大和綱 <small>日本</small> 二冊	同	新類題句集	五冊 同
和漢文操 <small>假名</small> 七冊	同	和名	二冊 蝶友
古今抄 <small>再撰貞亨式 拾遺十箇象</small> 五冊	同	鬼費句選	二冊 蝶友
俳諧十論 <small>新古評編</small> 三冊	同	麦林句集	三冊 柱麦
同 為辨抄秘説三冊	同	後篇	二冊 志乃
和漢百花賦	一冊	善柳發句集	二冊 後川
百一集 <small>古今秀逸發句集 百人画傳</small> 一冊	康工	千代尾句集	二冊 既白

楚門昔如石 二册 既白 白扇集 二册 澄化

姑射文庫 畫漢集 三册 曉齋 挑燈人 二册 北枝

芭蕉詩 名錄發白集 三册 蝶友 三册 一青

外歷友 一册 子冊 芭蕉詩行狀記 一册 踏雪

己巳之稿 二册 尚白 句牝房 二册 筆字

鄒端名所小鏡 四册 蝶友 三册 紙 蘇牛已云 二册 半地坊

其角七部集 乃一東 然山家不指集 涉續 二册 全於二册

最寶來治州 去友 秋之 全五冊 蝶端 之友 且用集 小本 五册 學水

Handwritten notes and seals at the bottom of the left page.

